

128 渡嘉敷ペークー(二)

(王様と碁・米俵・味噌)

あのね、これも戦前、年寄りから聞いた話だがね。まあ、内地でいうと宋呂利新左衛門といて、頓知の早い人がおったでしょう。沖繩にもそういうあれがあるんですよ。

これは、名前は渡嘉敷ペークーといてね、この人の話だがね。ペークーというのは位じゃなかったかなと思つて聞いた。この人の話だがね。これは本当に頭が利れよつたつて。頓知の早い人。で、こつちの琉球藩の王、王つていつたら首里の宗家。王様。王様の碁の相手だつたそうです。これがまた、頭が利くんだからね。ま、王様が、これが一番氣に入つておつたそうですよ。位はずつと下だがね。

そこにはまた、摂政三司官シツシといてね、大臣とかこういう方々がいるがね、もう王様はこの人を坊主御主ほうしゅうしゅといつてね、この人が好きでね、いつも碁をやる時はこれと呼んでやりおつたそうですよ。

そんで、夢中になつたら王様に敬語を使わない。敬語を使わないから、またこの大臣の方が、

「貴様、この、下品のくせに、百姓のくせに王様に向かつて何ていう言葉を使うか」と、こうお叱りを受けたと。王様は叱らないよ。偉い人が、大臣が。そしてまた、これは頭がいいからね。碁を打つて、一つ打つたら下がつて、もう、礼をして。この大臣の言うことを、偉い人の言うことをそのままやつたらね、王様は、御主ごしゅというんだ、王様には。御主。王様は、

「面白くないから、あんたがやるようにやりなさい。おんなじあれだから、碁をやる時はおんなじあれだからね、あんたが今やるようにね、引き下がつてかしこまつてやると面白くないから、碁は。お前がやるようにやりなさい」と。

で、もう碁を打つて、王様も満足して。

「あんたがね、何か欲しいか。欲しいものがあればやるから」と。

「じゃあ私は御飯を食べたことないから、芋ばつかしだから、米を下さい。一荷の米を下さい」と。そして王様は、一俵の米を持つてきた。このペークーはね、

馬を持つてきた。馬に鞍掛けて米を貰いに行つたつて。そして、一俵だから、積んではひっくり返り積んではひっくり返りしたから、

「もうこれでは持つてゆけないから二俵下さい」。

で、それから、

「味噌がないから、田舎は味噌がないから味噌を下さい」と言つたら、

「あんた、入れ物持つてきたか」

「入れ物、持つてきてない」と。

「じゃあ、やるから」と言つて。で、入れ物に入れてしたら、

「これはすぐは持つてゆかれないからね、恥ずかしいから」と言つて、庭にめぐつて行つて、一番王様が大切にしている鉢植をね、折つて、その味噌の上に差して、こう持つてゆきおつたつて。

王様も、癪に障つてもね、癪に障りきらないわけさ。こういう頓知の早い人だつた。